

大学名	北海道大学		
University	Hokkaido University		
学部/研究科	水産科学研究院		
Faculty/Department	Faculty of Fisheries Sciences		
研究指導者	松石 隆	職名	教授
Research Advisor	MATSUISHI Takashi Fritz	Position	Professor
帰国留学生	レディアヌ・イカ・ハルリアン		
Former International Student	LEDHYANE IKA HARLYAN		
派遣期間	2022年8月31日 ~ 2022年9月9日 (10日間)		
Period of Stay	10 days (31 August 2022 - 9 September 2022)		

<帰国留学生プロフィール/Profile>

国籍	インドネシア
Nationality	Indonesia
所属機関	ブラウイジャヤ大学
Affiliation	Universitas Brawijaya
現在の職名	講師
Position	Lecturer
研究分野	水産資源学
Major Field	Stock Assessment and Fisheries Management



帰国留学生から説明を受ける研究指導者/The former international student explain to the academic advisor

<研究指導者からの報告/Research Advisor Report>

①研究指導概要 / Outline of Research Guidance
<p>帰国留学生レディアヌ・イカ・ハルリアン氏は、インドネシア大学のトップ5大学のひとつであり、北海道大学大学院水産科学研究院と交流協定をもつブラウイジャヤ大学(UB)水産海洋学部(FPIK)の講師である。レディアヌが関連教員とともにプロジェクトを立ち上げるに際し、松石が現地に出向き指導し、継続的な学術交流と新たな留学生の獲得基盤の確立を目指した。</p> <p>到着後、学部長、副学部長、国際部長、コース長、北海道大学卒業生との会談を行い、交流協定の更新などを含め、学術・学生交流の具体的内容について打ち合わせた。帰国留学生には、共著論文の論文指導を行った。学部学生120名および関連教員へ講義「北海道大学の紹介」「鯨類学入門」「データ欠乏下での漁業管理」を行った。プロジェクトメンバーと漁業視察を行い、今後の研究の発展について帰国留学生をはじめとするプロジェクトメンバーと打ち合わせた。</p>
②研究指導の成果 / Results of Research Guidance
<p>今回は、バリ海峡東岸、西岸、東ジャワ北部、南部港において、まき網および刺し網漁業の視察を行った。極めて活発に漁業活動が行われているが、近代化はされておらず、多くの作業が労働集約的であった。労働力は余っており、雇用を供給する観点から、あえて労働者に仕事を作っている側面がある。場所によっては、まき網漁獲物の選別や流通は複雑で、漁獲統計が取りにくい。また、漁獲物の5%程度は労働者へ現物配給され、無記録漁獲となっている。公式漁獲統計を利用する際は、注意が必要がある。</p> <p>現地に行かないと分からない、漁港の衛生状況や魚の取扱い方などについて、見聞することができた。また、漁港管理事務所等から、国の漁業管理方針やそれを現地に適用する際の困難なども聞くことができた。</p> <p>今後発展させる予定であるインドネシアの資源評価、漁業管理に関する研究に対し、より現実的で適用可能なものにするための基盤的知識が得られたことは意義深い。</p>
③訪問大学等での学術交流 / Scholarly Exchanges Done at Universities Visited, etc.
<p>到着翌日に、水産・海洋科学部学生120名、プロジェクトチーム他教員20名を対象とした特別授業を120分にわたり実施した。</p> <p>内容は①北海道大学の紹介、②鯨類学入門、③漁業管理と全球的食資源問題への貢献 の3点である。</p> <p>「北海道大学の紹介」では、北海道大学が日本の上位7大学、THEインパクトランキングで世界10位、日本1位に位置すること、2人のノーベル賞受賞者を輩出していること、日本の近代農学・水産学の発祥地であること、全世界から留学生を受け入れ、全世界の大学と交流協定を持つグローバル大学であることを説明した。さらに、北海道大学水産科学研究院のミッションと研究分野の詳細について、および国際食資源学院についても説明した。</p> <p>「鯨類学入門」では、鯨類の基礎知識、漂着鯨類調査の重要性、研究指導者が実施している漂着鯨類調査活動の意義と学術的貢献、特に新種鯨類記載の経緯について説明した。</p> <p>「漁業管理と全球的食資源問題への貢献」については、世界の漁獲漁業が頭打ちになる中、インドネシア近海の漁獲量は単調に増加していること、日本もインドネシアも、小規模漁業、他魚種漁業が主流のアジア型漁業を行っており、欧米型漁業とは大きく性格が異なること、インドネシアの多くの漁業や日本のマイナーな魚種を対象とする漁業に見られる年齢査定や漁獲統計が入手困難であるデータ欠乏下での漁業に対する漁業管理手法について説明し、日本が、これまでの漁業管理経験を元に大きな貢献ができることを詳説した。</p> <p>学生からの反応も強く、多くの質問を受けた。</p> <p>また、滞在中3回に渡り、ブラウイジャヤ大学水産・海洋学部と北海道大学大学院水産科学研究院、大学院水産科学院、水産学部との間で締結している、学術交流協定および学生交流に関する覚書の更新について打合せを行った。これは、インドネシア側のフォーマットの変更に起因する更新であるが、この打合せの中で、北海道大学の交換留学生制度やサマーコースへの北海道大学学生の派遣などの具体的な交流活動について、詳細な情報交換を行った。</p>

<帰国留学生からの報告/Former International Student Report>

①研究指導の成果 / Results of Research Guidance
Through the lectures and welcome meetings, we arranged the presence of Hokkaido University in the faculty. In addition, during the on-site research trip, we were often made aware of the way of thinking for the quantitative understanding of fisheries through suggestions from the academic advisor.□
②今後の計画 / Further Research Plan
Since the academic advisor understood and showed interest in the actual situation of fisheries in Indonesia, I decided to get more advice on fisheries resource assessment and fisheries management in Indonesia in the future. In addition, we would like to have joint research and publication funding to improve the research level.
③本事業に対する意見・感想等 / Your general impression and opinion about the Follow-up Research Guidance
We are honoured to participate in this program at my institution. The program generates an international environment for our faculty, not only for academic matters but also for research. We hope there will be other great collaborations between the 2 institutions in the future.



学部長・コースリーダー・講師と一緒に
Group photo with Dean, Study Program Leader, and Lecturers



インドネシアの小規模漁港
Small scale fishing port in Kondang Buntung